

『全訳 男色大鑑（歌舞伎若衆編）』解説2

「若衆を知らずして歌舞伎を語るなかれ」（染谷智幸）の訂正と説明

染谷の解説（二二四頁）で阿国の説明に『歌舞伎図巻』の図（以下に掲載）を使いました。これは『歌舞伎図巻』（河竹繁俊・榎崎宗重編、東京中日新聞出版局、一九六四年）に載る、榎崎宗重氏の解説等に拠りましたが、これは旧説に属するもので、現在では阿国ではなく、播磨の采女の図とするのが主流です。よって、ここにその点を指摘し、以下のように訂正いたします。

【訂正文（傍線部が訂正のために後入した箇所）・二二四頁六行目より】

すなわち、出雲から来た巫女（阿国）が、本来は、巫女つまり神道なのに、仏僧の格好をして鉦を叩いて踊ったということなのです。さらに、これは阿国とは別の播磨の采女の図と言われるものですが、その図を所載する『歌舞伎図鑑』（図①）等によれば、胸にクルス（十字架）をしています。こうして見れば、阿国をはじめとする歌舞伎の祖たちの世界では、宗教がごちゃ混ぜになっていたことが分かります。



図①『歌舞伎図巻』下巻（河竹繁俊ほか編、東京中日新聞出版局、1964年）



拡大図

受け継がれる歌舞伎のDNA

加えて、そうした歌舞伎の祖たちは、刀を差すなど男の装いをしていたとも描かれています（前掲の『歌舞伎図鑑』でも、そう描かれています）。他の文献によれば、阿国は、舞台で男装（当時有名なかぶき者、名古屋山三郎に扮したと言われます）して、茶屋（遊里）に客として乗り込み、女装をして遊女に扮した男性（阿国の夫と言われます）にしなだれかかって、性的な濡れ場を演じたと言われます。すなわち阿国は、宗教も性も完全に倒錯した世界を作り上げていたのです。

（以上）